十萬三千餘首

月窓

湯子箋序

夫動天地感鬼神者莫近於詩人心破家業詩有正與変不下好詩則色有耳詩有真与僞是故如好色者

和
愛媛文庫
愛媛文庫

特
門へ13
3633
6
昭和三十二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

用詩解為哉。吾友茶
釜先生顛日以吉原
韻解也予帝唐人之詩其
吉原之善悪無一不
施其解也。嗚呼非是
先生之好詩及色則
何以如此之詳且
尽吾哉。
呼謂飛
生之謂
也乎。遂為之
序。

壹貫三年十三月

陶鐵房撰

題袁氏別業

茶釜散人　著

門人藥鑵子輯

主人不相識

偶坐為林泉女郎詩

莫謾愁酤酒囊中自有錢

夜送趙縦

趙氏連城璧

由来天下傳

送君還舊府

明月滿前川

易水送別

俠士悲歌慷慨を發てうけいさうだんさんむる也へよりか塞
を出る北口のみちとをるへし云云はいのたまわがかつり

いふこころまでおくりて別れをする十今は飛七といふの
むとこもこうりのおじんきいまり三百おまでねざり
うけてもていしも宿なけて四五一泊もまりけへる
いといふそこで女帝もあもていしもをうくむることと
あるうこ地のようくおうむいの俠をたのこ今宵女帝
をぬもませよまうくれりござまてをれどをそ
のうおいをめつてたいとにのは丹七うてう
桃花の燕をりのよーて二世三世のゆくそく
ををへこれをーつてちやをちぢわ遊丹くく
といふ

此地別燕丹いのちがけのちごとうり
壮志髪衝冠ねんごろよたのんでみる
せいぬをこちかせてこせまをう
りーちそんーるばいきていは日

こりくまいとたちまちかこさうぢちうこ三絆の設乃
うさたる燗うりをつきぬくいきかいおり
昔時人已没ーもこりんこぞうりくく
ぬさためおいうさよちや
今日水猶寒今このふうふがれのをてあさゆふ
かざりをこしなりのちよたうぐをうりぐひよーてわう
しうめをやうるべきめのををくたぐなるへさかの井戸乃
こ丸六のこちぐいかあへ丸ぐいあちうあへうつのまぐで
ゐるとりのつをと今日水桜をといふけつくぬをー
贈喬侍御喬本ゐにごーとやいえる俠侍
あり山俠ふう川へんて名たうさ大

ゑようく磯ぜりの
ちよつひすてゝりそのころしもらねげやのまこ
ん雲閣墓とごうして大あらあげやあり〳〵宇頂天
へもの踊らべさいきおいあるとてうんくといのこぞさた
しもさるのまて前付のあをつくんとて名さゝきたじん
を二十八人ごくさいしきよりさしおごりのていなかく
おさゝりゝのきゆん佶大きんをいふたれどるおうだもよ
でゑのたゝさをにくこ加へさりしをぬるものの
あをれんでこの詞をつくるといふ

漢庭榮巧宦（カンテイエイコウカン）

あゝもあゝぬのさいろをさしていふ者ゝをさしていふ栄
雲閣薄邊功（ウンカクハクヘンコウ）

おう場処て名のたゝきハ
さるまたゝぬといふこてろ

可憐駟馬使（アハレムベシサウバノツカヒ）

白首為誰雄（ハクシュタレカタメニカイウヽ）

よをぬるあれもうんかくまをふつてみかふ川がよひなすら
ひ志〳〵あくまをふつてみかふ川がよひなすら
子夜春歌（シヤシュンカ）

うひふくそこちをこひちしあうくあへまをくひちしあうくあへまをくひちしあうくあへまをく

已被春風吹(スデニシテフウニフカル)らへこ
てもおのびますいそぐころ
てわまくらなりて
妾心正斷絶(セフカコヽロマサニダンセツス)れようけこれまつけちやひさえる
君懷那得知(キミガヲモヒナンゾシルコトヲエン)さうとふてゐるも
うまこゝろもちくだよそのくるめし
くさりなふてゐるもしさうふうさ

女帝一首

汾上驚秋（フンシャウアキニヲドロク）

北風吹白雲（ホクフウフクハクウンノソラ）七月中（シチグワツチウ）

まてもをしに八月（ハチグワツ）

さくぜがふいてくる

萬里渡河汾（バンリカフンヲワタル）幾多万里（イクタバンリ）

心緒逢揺落（シンショエウラクニアフ）いろくゆんのそろいぬをうない

秋聲不可聞（シウセイキクベカラズ）

蜀道後期（ショクダウゴキニヲクル）

客心爭日月（カクシンソウジツゲツヲアラソフ）

来往預期程（ライワウアラカジメテイヲキス）

秋風不相待（シウフウハイニタヅ）

ゆさよるさけるやうのくるめとおもひをこそくく

先至洛陽城 賜第(ヲハリテラクヤウジヤウニイタレバダイヲタマフ)

照鏡看白髪 (カヾミノテラスニテリハツヲミル)

うるしくの

宿昔青雲志(シユクセキセイウンノコヽロザシ)

のむすこの女をうるまでよるまでおもひおもひとおりのてわさよ

蹉跎白髪年(サダタリハクハツノトシ)

りふねんおきまへよるりていうにらーいのいきおくいろんへるるかしいとてをろ

誰知明鏡裏(タレカシランメイキヤウノウチ)

はるがきをられもちろまいう

ひさーくけかぐこがもつてわる

形影自相憐(ケイエイミヅカラアヒアハレム)

ちをこづゝさそろまゝをれがうるかど眉(まゆ)をろといけぬ

同洛陽李少府觀永樂公主(フクヤウノリセウフトヲナシクシテラクエイラクコウシユノハンニールヲ)

入蕃(ミル)

ぶをして内ざよこたされろくやはたり女帝ていしゆとまを(ぬち)

べおひめさ母のやうにたいかるい一ぢんの女帝ろれ

ヘン 邊地鶯花少(アウクハスクナシ)

ゝせへんどのゐびをもろーぢんりてやふ

もうくぞうぐひをのさくづるまうみおもりろきじまうろりなが

年來未覺新正月（トシキタレドモイマダアラタナラズショウガツ）

美人天上落花辰（ビジンテンジヤウヨリラッカセキタル）

おろるやうな姿のどし（ヨメ）

龍塞始應春（リヤウサイハジメテハルヲヘルベシ）

ろんの女房がきたれば（ニヨウバウ）

つゝしてついてゆくろおろる女房がそぐにもみることとて

かゞみを一二まいさろせろ（ヒキ）

靜夜思（セイヤシ）

ろんの女房がよひろうさーきをあけろく

牀前看月光（シヤウセンゲツクワウヲミル）

しやうにうんでいろうさだもの

とのまけおし（ウタガフラクハコレチニヤウノセモ）

疑是地上霜

三つにもはつめるくろる

やうまもろくる

舉頭望山月（カシラヲアゲテサンゲツヲノゾミ）

とたゞこゞろのんでゐる

低頭思故郷（カシラヲタレテコキヤウヲオモフ）

ろい舎ろうちもろ

怨情（エンジヤウ）きゆくをうらむ

美人捲珠簾（ビジンケンシユレン）　しめれんいのかれんと
深坐顰蛾眉（シンザヒンガビ）　ろうがよい
但見淚痕湿（タダミルルイコンノウルホフテヲ）　そのうくるさをそうくるがー
不知心恨誰（シラズコヽロタレヲカウラム）　どのをそうくるゆうもれぞ○

よつてぬくさる
ところゝをもさゝものかてそのひけみちのあるをさゝし
おのひをもゝだるをれさておきさへつてきれ多がくる

とゝのゆうなゝえよりたで一ふりのとにてまことれ
ならぶいてぬりのありやくもをれべるきだをへありくもむ
かしだうぜんろあるよびごくつくせられしをなびひ
ざーをくもりありひかさうさまどにふてであひてくや
ーかりしをおひざーてくもありこれゝこまくごのをきにて
残目へいきくなくもまこれをきよりだをいまつさくものをんじてお母さま泣
ひろりをくみてさろすべーお浩よりんまをくとき地女
のゝをにのをせんごかだ

秋浦歌（シウホノウタ）　ゐ仕
白髪三千丈（ハクハツサンゼンジヤウ）　うーまをでといふの故（こ）るまへ
ゝえりをくはろといふもと

まといふありきたる俠者(ぎょうしゃ)のごとよおもん屍(かばね)の大坂
よでらでくくいのろいそのながきをさいそのよいく
ウレヘニヨツテカノゴトクナガシ一どねんがあけてあまりしゆくさん
縁愁似個長(で)出(こゑ)唐(とう)してさうをうれしさのりきあでもこうけやうとあも
ひのかうぶるおこせこれをおりくべひのけもぬけるやうにおかりそ
れるうづもろくるやうにもなりもろく
レフズメイキヤウノウチ
不知明鏡裏(かがみ)何処(いづれ)得秋霜(しもの)
もあるうつちびやないくく
イヅレノトコロニカレクサウヲエタル
何處得秋霜(しもの)うつちがつひりくもてがふりいせまい
このさしりくけいろくのありあいとやをぐくそやり
女帝にれろいものぐをなりめさるをひりくれらやう

もかりをつゞめもつて步ちをもあさい連峯ふろうふさ
の大こんよハちうず

衆鳥高飛盡（シウチヤウタカクトビツクシ）ちうちやうハちんざうかぶろさいこ
てこゝろてゆく　りちおをいつこゝろとくとゝいつてたつ

孤雲獨去閑（コウンヒトリサツテカンナリ）こうんハちや座もおもさせのそをーうをんでく
ろゝろよひとりれちや座もおもさせのそをーうをんでく
るいよくさみしくなるろ

相看兩不厭（アイニテフタツナガライトハズ）ざいのものとゝもと
ろいよくさみしくなるろ

但有敬亭山（タヾケイテイサンアリ）のちいられこぬてもなくをれさ

〇評ニ曰ハ此一ツハ大のおんだうてたゝもこぞうちんさう
れひとりもみゝりもあげさいこもつれてくれるもへやうも
むしろに大じんづゝしてあるさぞよでゝのちくへ女房
座と茶やをおこそのよこんゝぢやよろてかくのどくを
ゝゝうとこゝくゝりまくけるいあるまくく

見京兆韋參軍量移東陽（ケイチヤウノイサングンノヤウニリヤウレスハナヲミル）

さたる女房ゝり参軍（さんぐん）といのこの女房のとこんぐん
にくいゝうちぐんぐんとゝもかこさをまーへぐさ
きといふこてろでさんぐんくとやゝをつおかんの
名とはりぬたゝをれのとゝうにさだろてねんもあきさう
ゝゝしゝるよおつてかんざうんよひまーく
もよえぐくうるよ女房ゝとがなげれゞひ一夜（えや）をぬぎ

小だうぐをうりしろぐべやくていきいちくさなどを
今ハもつぱきにもあらずびやくしやうのなりわひとでうけてりとぜ女働(ぢよどう)をするのこと
戸町一丁め東(あづまや)屋といふところへもきりあるれんぜ紙
すしいふ

朝水還峭(チヤウスイカヘツテセウニキシ)海(リウジンカヘツテゴニイタル)をべてのおへうこくくと
流人却到呉(ゆくさたまりぜこちあり
の地名(ちめい)人をいざすところうれへ
相逢問愁苦(アイアフテシウクヲトヘハ)
りりちもの女房(にようぼう)がおれうへねんがおいてゐ戸のうさへかえ
るーとみちあるよし乃つとめにうれてゆくへさうさ
まごとゝあり
このくよちきよあてらのうちの
かまーさをそふうへ

涙盡日南珠(ナンダハユトヘぐべクジツナンノタマ)
ところよ紱人(うじん)ありなくをそ
ありし話(はなし)をかりていふ○西行(さいぎやう)がいちくあのなごり一ニづゞ
云(いふ)ごでたらいものとあり
とゝくよりたまよあるもいろくりといふべうごに
臨高臺(リンカウダイ)
さめよあるあとゝゝぬくとつゆう
をどんでいあうまい○日南郡(にちなんぐん)といふ
なぐいてはあらまい
相送臨高臺(アイヲクツテカウダイニノゾキハラン)
川原杳何極(センゲンエウトメナンゾキハラン)
きやくいふ○でゆく
二ついよりこおくる
お西(おにし)でしれへんまでこあれごも
それなさだめつねよゝぬ

日暮飛鳥還（ジツボニチヤウカヘリ）

ちんくきたりしがこのぎのうてみどそのぎろこのあまぬよりくあとにてきけべつけのぜせのよー

行人去不息（カウジンサツテイユハズ）

班婕妤（ハンゼフヨ）ひとりねむりをさそきびじんまり仕女ろうかいのものにくゆくをへんのねさそをうてみかのれちやうおいもおところをうてをうてまよかこつけて若信宮（うてびこんでわさとがひろこのへんをのこずきりそのうへおりふかとこさうくふよあるたくさをーてひさこんでわるとてもうちやくびやうにかかれべをこーがりの合でもめうれそ

怪来妝閣閉（アヤミキタルサウカクノトヅルヲ）

朝下不相迎（チヤウヨリシタツテアイムカヘズ）

總向春園裡（スベテシユンエンノウチニムカツテ）

花間笑語聲（クハカンシヤウゴノコエ）

ふ○お豹が曰人のこゝろもちをしばかりのようひ
くつさる山の分法

雑詩

すとうぶしたてい

已見寒梅發　去年何處看

ゆくとしのさむさもまりてつゆぶくろ
ふくらむさまでざんきんがさいくばそれかよ
十二月のそらにもあるかんむいがそろ〳〵ひらけるさま

也応須臾間　不覺已二年

さてもはやつい二月よもなつてもよちやうの
さへづるようさてもいろをもうるおいもるのくさハ一ハおをくとして
復聞啼鳥聲　愁心視春艸

こゝろうきたるものあれどもうえ

つてなげさせ悔をおこすついこうけきはなりふるうくなれどけ
ちよとたゞとうの毛もぬすまよりくハおされ入す

畏向玉階生

床まんくさゞまへてくるもわれ
門もこゝぬやうに毛がもうてもついらの玉乃
ふさぐもわれぬとうちなげきさつていうり玉階玉門ハ牡口のこゝろへし○志道
軒の歌仙ホもとくよりぬこゝろ〳〵要仲とゆりまつて
迷とそべ

鹿柴

こまがふくかうへ

空山不見人　但聞人語響

ぶぐるひをもるところもこゝろとこゝる
ろなれいくんでまぶちや屋とうか
空とゞとをふつゝらるものゝおゝ
まるところあり女房しうまいとを

去ゆく人を空山しく人をこそとうるところ

但聞人語響

返景入深林

九京かいりれやろのよゆうにてうちんのひろ

復照青苔上

のさんして苔をめぐらしてありがおんてもいる

よろしくありがおんてもいる

竹里館

こゝろのゆくてをしのさいをこゝにそ

獨坐幽篁裏

ここらよりうてたれもかまひもせぬよたらく

彈琴復長嘯

もわけじよひのやくそくるれいとおくおのれみのうへの

深林人不知

あるふよそうなのつてれ茶をろひいくわるめへうちやや
にがいがんばよくこのうしろのうへひきこまませてあくまをくれもちりてが
明月来相照 一服よ一どつ、満月のあろがごと
のやうそくをるものうすれるまいろそ亡
女帝がわつて幸をもろうとでもくまをくれもちりてが
ものうさようさりてもくまをくれもちりてが
もらんしこまる
長信帥 ちやうしんのかみ

てゐるのないめへよ
ものたよくて佑うばる
のやのちふさうどまーてもくこくさといふところの
るべー
長信宮中帥 ちやうしんきうちうのかみ
毛がうへてそのやへもも
年年愁處生 ねんねんしうしよにしやうず 一ねん二ねんのうていまいまこぶ仕舎
女帝のうれのる処ありんそかうよあんんもろさん
時侵珠履跡 ときにしゅりのあとをおかす
四れぬといふこうろて大
頭もあれども今へ蓬蒿みちを没をといふごくさえて

のをきをいふ キヨクカイニユカシメス

不使玉階行 そこでふと光があつくいさうけて見
びやうかこつけてもけらーてへえきをねてゆとる人

少年行 シヤウネンカウ 武たの二ちんばへやたりのくろささうり
かさ

らうちをのりちらーすと門へのりこまんともる

いさみひをにくる サンゴノムチヲイキヤウノ

遺却珊瑚鞭 玉をかざりあうきふさをつけくるむち
をとりちらーす大門のうちをるや

白馬驕不行 ハクバヲユツテユカズ そこでるもうんさいいてめつ
よむーゆにちの着せわいろく

章臺折楊柳 シヤウダイヤウリウヲオル 柳ちや屋のうあり女房ぐあ
ゆりくさぐつきころ〳〵あつく茶やへでくおろそれを見ちと

春日路傍情 シユンジツロハウノジヤウ 爰の肌へ見せさきでもくうー
ぬとこれむうりをまつてあろ此

まのやせ字かみてふくうのうせ助

送朱大入秦 シユダイガシンニイルヲオス 大の俠ありまろてきれみをゆ
ーごくうのうちいくぜつをいひけちやをとぐ

なつてきれみをゆるそのうく朱大をこまんとて同
町の女房とうでみまいゆちくそのまくをうんぐ

ことばのかんまんなるごとくひかえきりれ刑(さつ)でもなくこのあるれい容易(ようい)よきゝするのかおらに秦(しん)の大俠(だいきょう)のたとくていそのこころへゆくとこころなれべさきれ女帝命のべつゝてこんいるが目ころ斷髪(だんぱつ)のまゝもりとて一めんのことゞかべとてけはをつくりとるとおり

遊人(イウジン)五陵去(ゴリヤウニサル)

かこきりよゆくく(ハウケンアタヒセンキン)寶劍値千金(をそのちかこをり)即刻刀(ときのかたな)

ここよのぞんでいき千まいのさりおもしろくせだに今夜(こんや)朱大(しゅだい)がお母(ぜいさま)んぞものついてゐるところへおめぎもおくせだに

分手脫相贈(テヲワカツトキダツシテアイヲヲクル)

ざーるるすむーはかこそびようのきりおめせてやりんもありとおりとというのてふところりそりそり

平生一片心(ヘイゼイイツヘンノコヽロ)

ごろござんせないするをもちおまいとうちところろがおをしろをうちこんでいるんせといくおまいのところへろちがこよあもっていきるんせといくおまいのところへろちがこよあもっていきるんせといくおまいのところへろちがこよあもっていき

處處聞啼鳥（テイキヤウラキク）

ぐうりくあちこちやうく

夜來風雨聲（ライフウノコエ）

しゃうこうにほきやうれあまたのきばうりん

であつようちくぬぐ

花落知多少（ヨツルヲシヌタシヤウゾ）

にくハ尚世（ようせい）く

洛陽訪遠拾遺不遇（ラクヤウニヲトフアハズ）

とうくへのだんしきよくありけれどもおごくのおを

んぢうにてあんぞうをみちよおしれものでもおもひてある

ひろうて郎にさてるうどのをまつくへありくれば拾

遺なし茶屋も女帝もいつつのよ名とある女帝も

なまりたためにおるく〜ぬあれべひさーしく消息も

せずはあくまでるにこのごろ大ごのあう二人まできれ

るをのうへ詩句まくよつてくるくやんのろなり

ちさびみそのでもないとみをやりしよさいやうで

もつりたまりがきてつけのがをよりしとその夜

材のまくでうくるうへる

洛陽訪才子（ラクヤウサイシヲトフ）

くうちさへて夜をあ　ところといべかやんだーへんことよ

あんなつしさまとまをせまーくちよじーたーをぬがちの

それがーあーしくあげまをるもいうぐをぐーおまりくく

いのやうをまとこへる

江嶺作流人（カウレイリウジン）
聞説梅花早（キクナラクバイクワノハヤシト）
何如此地春（ナンゾコノチノハルニシカン）

ろいところやがそのくさいくさをいうといひまんしー
ろさよどのーてをよびませうことよつけのやせよりまん
ーておいそうしいるまぢやとうたべやきーくきこゆれど
もとてもそのある方のうへをもとのこしさうに
ざんねんとらの巻うをもとうもろこしぬまぐく

洛陽道（ラクヤウダウ）

古（ふる）へつけのがせよりしとつうひ
のものいのこバかんよう
もてぬしがいひまんをにる火ます
いろーむめをどもをくさいてあほ

大道直如髮（ダイダウナヲフメカミノゴトクノ）

春日佳氣多（シユンジツカキヲオシ）

五陵貴公子（ゴリヤウキユウシ）

雙雙鳴玉珂（サウくトメイギヨクカヲナラス）

長安道（チヤウアンダウ）

鳴鞭過酒肆おもてでいつけんをとひつくりかへしてゆくのこゝろをそ

袨服遊倡門百萬一時盡むかうにありさけさんがふつひきやうせうねんのてぬくもりをうけしるまもなくあるもそぐわ茶屋へちりけるおんなどもに自ごふんいあつたれとおりのてんをやるやうげいをそうぶやうつのふしころがかるくなんたためありだつは二三十両の事とやすべし

舍情無片言

るサアそのあるといふやうにそこでおごんもくやしいそれども一ごんもざんねんらしきていをぜまこのまけおしべし○評曰この孫母一世のよいむすこのふとてきごろくしろくもおうしくもないところでいそれぬものへ関山月

しろて乾とへ関山をへてうきるんざをそうぶごとく

一雁過連營

てうるとへ連営ハうきろくのてあんをやう日是攪乱ろくまちの女帝此旅の屋基とうるべし

繁霜覆古城（ハンサウコジヤウヲ）今のハたーうぬーしもがごであるとゐみじをひらけべやさせどき霜が一めんはえちくくてある

胡笳在何處（ユカイヅクトコロニカアル）きこゆるハこれ沙ぬーでうみとおもへべこれもまた夷（エビス）のうたをぐる

半夜起邊聲（ハンヤヘンセイヲ）いよく深更よおーんで歌乃聲（コエ）がきこゆるまもなくあらでてゐくのちんざしあけてまつてゐれべそれまもあらでてゐくのちんざしぐらんでまる奥（おく）で明（ひ）をしのーをがもるとしめさるがくとありをぐる如へまぶよやくおまもりは悲歌（ひか）ありをんせいといふおれりやまをながうしされからををぐてゐるとまるべしーえる殺伐（さつばつ）のの青（あを）おれべなり○評曰はなちや座が

ぐつてんのまぶおとえくうりぐんべ女房よりくのごときこゝろづくひをさゝるぐありなす（クバリニサウヲオル）

送郭司倉

たきゆあつて放（はな）さゆへうえるをゐてゐるをーてゐる女房がおいくでおる詞とこも全句（ぜんく）をのつて考（かんが）べし

映門淮水緑（モンニエイメワイスイミドリニ）

これもまうちがぬーれのりをんをりの水が天門へうりてあをくとんゆるをおりの色へぢや

留騎主人心（キヨトヅムニユジンノコヽロ）

いやろまでもそでよおいて幸（さき）をへゆるうへうちやいやろまでもそでよおいて幸（さき）をへゆるうへうちやいやろまでもそでよおいて幸（さき）をへゆるうへうちやいやろまでもそでよおいて幸（さき）をへゆるうへうちや

明月隨良掾（メイゲツリヤウエンニユヲ）

お月さへおるもをぶりれ勾法（まいぢく）ぬーの舟

てくらにやうにろちぢこそのてまりいんちよ
春潮夜夜深(シュンチャウヤヤフカシ)まるく潮(しほ)のさしてくるおぶんまへ
こんでおこしてくれんー○俚(リ)諺(ゲン)曰(いふ)ことわざに
代(しろ)のうちやうぞうぶつ(ブツリヤウノテンタイ)をつくるとあるその恐(おそ)れ蓋(がい)し
答武陵田太守(ニユタフ)去(さり)ん仕(つかまつ)る墓(はか)より
ざされ今(いま)れ彩(さい)ざうとよだれ
もろくこしろ女帝ありりもと仙女帝(せんにょてい)
彩(さい)緞(だん)のかさへみをおこすそのろんじよこの洞(ほら)
つくりてやるといくのの太(ふと)るとくのへたろうんでくよりり
仗(ケンニヨツ)剣行千里(センリニユク)ふぐん耳(みみ)かきをもさぬ(ぬか)ずう
ましいるとなり

徴軀敢(アエテ)一言(イチゲンセン)ろちぢこそのてまりいんちよ
曾為(カツテタイリ)大梁客(ダイリヤウノカクトナリ)ひり一徴陵君と申(もう)ひろんを
ちんちよ
れ(これ)もくのくへよさけ
曲(まが)へけつくもてことやちんをおまへもそうぐんへつて
出(いで)ざもおをじやをいぐんときをつけ
下くおがめをさけをうけ
不負(フフ)信陵恩(シンリヤウノオンニソムカズ)こんーふぐんーふぐんありいんす
をやあ(おや)ろをふつをりとおまるぐんーさがよい今(いま)までのそで
し笑(ゑ)ふんもよのーろちぢこりあるをおきくるんちんと
下くくろりとぢやのいけないちくしやうめれおいをい

うんぬりめとやもんを

孟城坳（モウジヤウアウ）田町（たまち）

のところよりよびしき茅屋（ぼうおく）をたて名を孟

城坳（モウジヤウアウ）と称（とな）へたり此（この）坳（アウ）の点（てん）などをして世（よ）をおくりぬ

ありそのむかしをたづねらくこんきよとありて今（いま）は女

きり者（もの）をよせをるとかんだんをして庵（いほり）を結（むすび）

ゐるものぞさてをのづからをえんといふをもてこの

活（くわつ）をなしてあるよしといひけいせい町（まち）乃

イホリヲユビヤウノ

ゐるとぞ

結廬古城下（ユビヤウセキニアラズ）

時登古城上（トキノボル）

そのいにしへをしのぶらひかこまきりのさき入（いり）女房の

古城非疇昔（チウセキニアラズ）

いきぢよりをとめてくさぬぎおたのまれくるをけを

つひよめくことなり

今人自來往（コンジンミヅカラライワウ）

いまごろ陽（よう）のいちたちおいらぐこ

祢べけくるをがるくあるとおもしろくおもれもろ

ところよあ〜ばしやんなるまでおをそうら

てぞつくるをの肥後（ひご）やくよおところへ処（ところ）歟（か）よおちろく

ゐも女房もろ〜のそれまいよむりくうさくもろ

鹿柴（ロクサイ）　山解（ヤマトケ）紋（モン）あり

日夕見寒山（ニッセキカンザンヲミ）　日のういくれよき山（やま）

へみる城（しろ）といふ心（こころ）

便為獨往客（たよりとなりてひとりゆくかくにさいわいす）

不知松林事（しらずしょうりんのことなりとは）

但有麕麚跡（ただあるはきんろくのあとのみ）

よ私この懐を敘すそのくるにおてそれかてくれひぐぐうふ
ーーうゆでさえーくのるとき私つざうかふもたれむべー
復愁（フクシウ）この愁（ざい）さ私（ひ）話で茶屋（まさ）
いろく池言（ひこと）をーてやうやくたちくりれ事（ぢん）
とおり復（また）もをくひつをいてーやはうをひんぬく
ふて復このくるとへさてかるをはくるとこ
萬國（バンコク）尚戎馬（ナヲジウバ）山河のもくぢりにも方（ほう）くのあく
さがあつておつをまくつをすもよくせたづまもろてうどいく
故園（コエン）今（イマ）若何（イカン）さぞ宿（やど）よもれていろく
昔婦（ムカシカエリシトキサウシキスクナシ）相識少（まくどの湯（とう）のうびをんでうく
よとさもれが留（とど）せうちまこ旧

くも湯（とう）がありて趣（おもむき）もまくなくうりしが
早已戰場多（ハヤクスデニセンジヤウヲホシ）せうこりもまくめの大（だい）な湯（とう）を
とこゆるとろぐうもすこしあきるとえうり

絶句（ゼック）絶節（ぜつせつ）古（こ）字通用（じつどうよう）およそ節句（せつく）というものの
（女帝のつくりものなれば題（だい）とて
江碧鳥逾白（コウミドリニシトリイヨくシロシ）多面（もいめん）こくみどりにみるへ夾色（きょうしき）
ろくくえるとおり
山青花欲然（ヤマアヲンハナモエントホッス）のこつるおり白多（しろもく）などうけく
ーろくいひをすうえべ旧方（きゅうほう）もまあせくとあるとくれるい
の花（はな）がもゆるやうにこあるともあ
それをぐ解（げ）しぐ（かぐ）し新（あら）た一（ひと）こおりせいぐるこの詩
をはるといふさる屋（や）墨（すみ）の女帝（じょてい）とさる己（おの）帥（すい）というをやり

てもくでこのねまりこの女郎れ一ぁせもろくをめて寝
けをさせその上へでおげるさうだんにぐるまようみてのせんとまる
そのをかりとこうのそこふうふーてえへでくかうもを濡しと
いひろをすでかをうけきをまるんともるときた大じんも去
ものまてけおをきくいざしさたのをりとについてくへつて
はりとをめぐしおりの入のせくその袴(はかま)こぎれるみあい
とぐくかきたろめきれみをおくるたーうるーもうこの乃
あるまあれべ一ぶもでたをこでこ帥へまろさをよるる
女帝へ花のむんでせ火のごくあくなつてかるといの
二句(コノク)ぬ(ヌ)

今春看又過(コンシュンミスクイタスグ)　この妻も目(め)をさだくひて
　もぎる
何日是帰年(イツレノヒカコレキ子ニ)　こうのおそこなるのていろうくるるを
　出でふうふよるるーのもれぬ

長干行(チヤウカンカウ)　塀の船着の喧(かまびす)りしく八江戸町
一丁目にく名たうき米(こめ)橋(ばし)もも池(いけ)
はよくむさくおのそりこれもなてものく指(さ)しをうるまおくぬかのよて前(まえ)
とろ色(いろ)をりて年(とし)もひうくあきまぬとりり
て今へかへあるさをもるをろくあでもれさぐんの八
百七(やおやつく在をろるまとりぬ
君家住何處(キミガイエイヅレノトコロニカジウスル)　いま
りひうがぐひそれべあもぐ
あそこで嶌(しま)うーおまへ
彩川(さいかわ)でへござりませぬ
妾住在横塘(セフジウツアイクワタンニアリ)　横塘をそちら海(うみ)をるる
へこくにをりまを

フネヲトメテシバラクシヤガンでいるうちに又ちがいの内はれいでできませんや

停舩暫借問

あれまへあのアルヒハヲノラクハラレドウきやうさんでへないうぞ

或恐是同郷

それゆくえを引でかれさ梅茶

いぬしもぬーさ

詠史

エイシ

吉原大全を詠めて

ナヲテイハウノヲクリモノアリ

尚有綈袍贈

むーさう女帝と茶屋とぐるよりありける

せよゆくするもちやうろうろ

ねぶつてうへるそこで茶やがの耳を

ぐれびやうきでそれ由へつれてくれいとおつもやり

ますごろへこれくがないとやうなりとこへますおあいさ

それべつのそれうさあくいでとまぬーてこゝをやる

二ついへ上れば女帝へ茶おもまいのときそうくされ小祀一ツで

あるへて居る田舎がんこうさまげものを七ぐちでもろたいて

あんまりでうさまげものをしやうりさあんべいもさめうりめ

げェよごこんでもまいやうりさあくめ帝をこざをあうしろちらぢや

さい少べェよとまをものがくうよるみきいてれこれのんーおろーいうみがうこれこつちをうりその令でゆうく月

武士で鬼若よせまろてうまいよるいのがおつて屋根の令美

日もありのんーさう朋輩よりくかぶせいろくぬけても先

らつういこうちがそくさんよりくかぶせいろくぬけても先

へ大勢そくさんへたくひとりさ非あく後をさりのんすと

いふてかくさんうう文がさいつみさ百あやそこうの令でこを

くおやよもうぜさうせこつちへそうさつていうよ女帝の子

猶作布衣着（ナヲホイノカンヲナス）

て居そふなものゝ女房ふうろうさんなり一ツでふるへ
ま曰今のなれぬけあさうりよりひまておんかうりよりつさのこゝろてこうらへさ
つの香をこへ入って波のつめとおがまれおくの会話をさ
らるおゝ先いゝさかゝふかゝに凡せをひいてめくらよい
をそといかるもあれがいゝかたまされるれむ
ひでもおいといふべしひつさ水月集をよまさるあや
まりりとちる屋

田家春望（デンカノシュンバウ）

この髭ハ江戸町一丁めのさる女房

るれどてくさんなへかみむけがそりたんをそうそれもへ兄さんや
ゆりてしもとだんかうしてぶ小袖も常も祢ぎうくまでもちう
おき今百あこらへらへてそくさんをたをけやちんしさそれ曰
へよ今山ありれもの中やてもちんよもちのんさてまいそれど
もとはかしうけるに伺ぎ正一ふんの田舎親父あるめし
のやうな風をかがしそんをこつゝさちやいくゝでもくれま
すべいまあこれてもそくてくれめさいとそくのねさうごま
のきりのをさせあうごめきゝていりやうごそれやさんそうち
で茶屋どのくよめんべえやふよだんかうしめさうてこうらひめさ
いと百あ色をそのけざすアフこへ

應憐范叔寒（ハンレンフンガカンヲアハレムオルベシ）

つおこさうくれゝく

不知天下士（テンカノヒトヲシラズ）

天下に名たうき棒坊も一至くさせるかどのあ月かこあるやう

酒斗のんで犬承平楽
いよくかりほをかりのむなへくる

出門何所見
モンヲイデテナンノミルトコロゾ

叩士ん打れば横とうきにくひときをまさくしい
モンヲヘイフニミツ

春色滿平蕪
タヌヘニチキナキコヲ

可歎無知已
あり今迎まてるもなりおのれ

うりしられもかまひてうない
カウヤウノイッシュト

高陽一酒徒
ちやうんていちどに

三びいつく

行軍九日思長安故園
カウグンキウシツキヤウアンコエンヲオモフ

多まあらばをくちうちの男社上務員ときのうんよよ
るといかころでまづくは女帝りくいれまんなる社会
うりしう親父うおめひいれまけてせんうくひそえ
をうる去ん九月の初句まもうめて中の町へるてふ
とむらい月まりてこよいのうかであっことおめへ故に
マうなつうくおめうふをもちを起うた

強欲登高去
ニイテタカキニノホリサラントホッスル

れをみあうしてる二つ
ヒトノサケヲオクリキタルヤシ

無人送酒來
おくりて来るものもなくそこでせひうくこあうりとこる

これよついてもおもふうかめひおさる
ハルカニアノレムコ エンノキク

遥憐故園菊 を去る〳〵ていれをそそぐ
うけしよおのひもう〳〵ぬおやぢがまけて薬とみきるれよ
とれ〳〵ひつきふうるさかくさんのかくこれきくとおめへぐみを
かるしい
センニヤウニソフテヒラクナルベシ

應傷戦場閒 さうりうさうくもまけ
るつさりをう中でこんろくもないよさくでおらふかあられ
ふう〳〵〇評ニ曰ウ〳〵一ねんよるゆへないまぐ有ハ
のるをおのかやさ〳〵犯こころあり今まねんもをぐると
もやさとあれてふくくるせよら〳〵てかうびきもひさます
きんごもります戦うりそさちのこんからそうよ有るこ
まべらう次

見渭水思秦川 渭ハ河南ノ河
大川へひとろよおるるとともるべし
渭水東流去 はおひで〳〵とおれておまへ
ごとくろちもおまへのところへゆくけなてふとそのいくよれ内のるひがるろちごろつまろんでもろくおいてもるぬるれどもせかるよこさんせない
何時到雍州 雍州ハ都名とこへろかやうにいつおまへしまぬよこのくよせていこのるさを
憑添両行涙 ヨッテリヤウカウノナンタリエテ
ろへたのんご

寄向故園流（ヨセテコエンニムカツテナガサン）

（理）

（クモン）登鸛鵲樓（シャクロウニノボル）

まこはるりすみもち女帝屋ありハクジツヤニヨッテツキ日の和山へかくむき日光のかくるゝ山うるでござうをあつてありその日のもとよたゝくさる金銀もとるいをこや茶やが女帝とくらまをつてあををめて金をおくさせるかこれしおなごをいふこゝろあり

（クウカ）黄河入海流（イフテナガル）

毎日うづくくて海へいれどもつぬよあるおまさといふ

欲窮千里目（センリノメヲキハメントホツノ）

き芝居をさせて見ふあるひい上でござうう作田をうんこうのさらくりせんせんかの字うらいてそふとりかやうまある窮のより好まいかやうにかるといふちや（サウニイソノウロウニノボル）

更上一層樓

そのうへへ又一層のかせてゐうといふいところへなつてよりおやのがつめたう二ついのしごもをもちいう法〇譯よ日一つれちや屋へ行茶屋よまいしあよせうれたまいい大屋へあづけちやと知べし

たゞしうまいてふとそのこゝろで入れてもくいのこへぬまたゝふ（センリノメヲキハメントホツノ）

欲窮千里目（センリノメヲキハメントホツノ）

き芝居をさせて見ふあるひい上でござうう作田をうんこうのさらくりせんせんかの字うらいてそふとりかやうまある窮のより好まいかやうにかるといふちや（サウニイソノウロウニノボル）

更上一層樓

そのうへへ又一層のかせてゐうといふいところへなつてよりおやのがつめたう二ついのしごもをもちいう法〇譯よ日一つれちや屋へ行茶屋よまいしあよせうれたまいい大屋へあづけちやと知べし

終南望餘雪（シウナンバウヨセツ）　終南はくだんしこうべ
歌字とにもつくるつゆ
うおやさしみどく
終南陰嶺秀（シウナンインレイシウ）　北むきれ方がうつくしてそよ
積雪浮雲端（セキセツフウンタン）　こゆる所の方へむひてあり
るり（リン）女房のもつくいぬの（ヒヤウイ）字雲のうにくまかのうにも
林表明霽色（リンヒヤウメイセイアキラカニ）　所の小がこれ方かの雪かうつの
おそく日がくれるやうにおもうつて日れかいくよもくれくしく
めいとくちうしく又東え雪せなうくて
のためうはよい

城中増暮寒（ジヤウチウボカンヲマス）　割をくく中う寒よそつてもそうく日
ふうりおくるさむさとこゆ
もこのうちうり始りなくおるる
罷相作（ヒヤウヲヤメテサクル）　こでハ悪一歩中れ至ニ（ちうん）こうるべし
避賢初罷相（ケンヲサケテハジメテヒヤウヲヤム）　ていこの女房でなけれバ招れぬといの事をあく
人もないそこで女房どもいよつてきうりのでうく笑をと
ぐんして一おとつてお（セイヲタノシンデカツイヨヲアラム）　る少へ表内よたてをつく女房が一
樂聖且啣盃　それうくみけざけをむしやう
どすみよ淡白のおよひつくけるを聖（ひじり）とはまんざうん

為問門前客（タメニトハモンゼンノカク）
こゝにござれるであるが（コヽニゴザレルデアルガ）
しばしまがこんをきれる（シバシマガコンヲキレル）
今朝幾箇来（ケサイクバクコルキタル）
へおぢが一人もあればよい（ヘオヂガヒトリモアレバヨイ）
よいの夫へていしもちくつてゐるところぢんがすき（ヨイノソヘテイシモチクツテヰルトコロヂンガスキ）
のよい平らくをいふてござれ（ノヨイヒラ〳〵ヲイフテゴザレ）
奉送五叔入京兼寄慕母三（ゴソウソウゴシュクニュウケイケンキボサンニョス）
叔しいてもの妹ありおもさんしいかこゝろ（シュクシイテモノイモウトアリオモサンシイカコヽロ）
戸のまんかくへかつついてもくを女帝がおくるこゝろ又さ（トノマンカクヘカツツイテモクヲニョテイガオクルコヽロマタサ）
紀ざつて婦女帝うけばござれて今でいこよ（キザツテフジョテイウケバゴザレテイマデイコヨ）
けむつもでくくしもろもろ表のよめいりところと（ケムツモデク〳〵シモロ〳〵オモテノヨメイリトコロト）

叮嚀（テイネイ）これへもこゝろへおくれるんしーの（コレヘモコヽロヘオクレルンシーノ）
雲帯残日（ウンタイザンジツヲオブ）君（キミ）
陰（インヲ）
帳別此何時（チョウベツシカイツ）
をちらくよ日をおくくべてる日も（ヲチラ〳〵ヨヒヲオク〳〵ベテルヒモ）
こゝなり（コヽナリ）
欲望黄山道（ヨクボウコウザンドウヲノゾンデシトホッス）
ちびんく世もふけいきになりよい婦女帝への（チビンク〳〵セモフケイキニナリヨイフジョテイヘノ）
上もつまるんちくぐぞめのぶの例よみ川（ウエモツマルンチク〳〵グゾメノブノレイヨミカワ）
てもひつくりえやくはくるを出さいとおもつてあり（テモヒツ〳〵リエヤクハクルヲダサイトオモツテアリ）
いんすれども（インスレドモ）

無由見所思（ヨシヲシルニヨシナシ）
左掖梨花（サエキノリクハ）
をけしやうてありてもりのぞみもいくぬさけみ
でいるないなさけがあり中のかうたがこの門のうちし
めるしくのやうをかいまる梢中せ何へでうけ
冷艶全欺雪（レイエンニックゼンユキヲアザムキ）
そのいろのあろきまゆきでいないろ
あろいがよいとてあつくひをむしやうよぬつていまの
をををつけとやうてこのいろいこの女房いそふでいないきめこまるで一
餘香乍入衣（ヨカウタチマチコロモニイル）
そのうへへちろくあるまもさびゆろ
さいがあろい——い香がもろいしやうにとめしろ

ものとこれも又ふりのよいとて障子取替だりいれ
ようよけやうよ梱（しきみ）臭きがあるそふでいないろ
春風且莫定（シュンフウカツサタニルコトヲ）
そよくうぜがやまぞにふいて
吹向玉階飛（フイテギョクカイニムカッテトブ）
ふきつけくれさい○評よ日この女房乃
ごとく年ゆうさしたれ和歌このときようりとちくれうり
九日陪元魯山登北城留別（キウジツゲンロサンニバイメホクジヤウニノボツテリウベッス）
元魯（げんろ）の姓名あり山といふのいおそうき
女房くいつのこころでこの女房此山へ登つてなづくこの女房此山へ
牝鹿（めじか）が仕合（しあわせ）のものでうみさされて抱（だ）いまくでせそよ
つまおいくがれがこよいあるまいをして嬉（うれ）しがつの詩後

つるとこへさうり舟あり○女房をおぐさひろのうら
綿連(メンレンドメ) 渥川(ナセン) 逾(ハシカ)り
うらうらさとうらまでもゆくてもすくてもすれもやらぬてのごとし山川のそて
しおいとおるで(エウビヤウトンア)やのよあり
杳渺鶩路(フカレ) 深又(ヲクチ)
ごあるゆくうさいくごろうちやいや右京(ウキヤウ)まろは歩
湯(ユ)のわくを渉(ワタ)もわくしてゆくところへる
さるる(ホウタク) 任(ニン)を捨(ステ)てゆくとこころとこへる
彭澤興不淺(アサカラス)
てみけざけをのこへんしいのうたあり

臨風動帰心(カゼニノゾンデキシンヲウゴカス)
きをつけよのあるうきさるりいひるんしやうくんでおーをところである
きのつまるうずろうりつけざされてゆくもよいやうなものあれどもことでよ
うでおくくくはしやますあつでもれてもものとへるそれ
くよいひをやますあつでもれてもものとへるそれ
少(スクナ)くるやいは出世(イデヨ)
平蕃曲(ヘイバンノキヨク)
この二首(ニシユ)船路(フナヂ)のうたをあびをよたるのをもちて
渺々戍烟孤(ビヤウくトメジユエンコナリ)
へひいてゆくうをつ
さをぐんぐんぐん

バウクトノサイサウカル　旅々塞艸枯
ロウタウナンゾトヅルコヲモチヒン　隴頭那用閉
バンリーコヲフセガズ　萬里不防胡
とうてあり
ソノニもじめの一句は二系へ女帝ど大ぜいゆき
其二
てをくふぎうみあるといふ意味をつく
る俤の三句はいざさうをくつつところのさま
さをいふ
ゼツバクタイグンカエル　絶漠大軍還
漠へ沙場をまぢかく作門砂里場
をかりて大ぜいの女帝どもをう

つれてゆくてうのど家ぢあつて大ぜいそうこみちてうやう
ヘイサドクニカエリ　平砂獨戍聞
ひぐくさこしくてめる
もけいどうれいりしところのり
クウリュウイツヘンノイヲトヾテ　空留一片石
つてうのと笑くへこをくくをもつてめるこびいーせ
バルエエンザルニアリ　萬古在燕山
なが
などご古ぢの中に大そこの松樹のありしところ　ぜんぱ
ケフこのヒサニアフ　逢俠者
たて帰りてうりあるひくぐつる

蛇をとり次第の名を付し小使を用ひ御用之外車馬をとゞむることなどよろしからぬ中万の内緒の洩言あり又去れといふて暗に其筆とゞこほりなくうでたてをまげ一ことしんぼうづよをもつて紙んでのろ〳〵ついてさやんといふ体くづをよろこびさかなをにくむ名づけてさやんのところへよりおのれがいきごろをもらすことをそうさう

燕趙悲歌士

燕趙俠の出るところやさだとてもあてこともうしておのれがいろをもる女帝へひそりれつ女房うるのえんをうりよろ〳〵ひろりおのく

きくれどもあそびよりきさまをおりくべてる用もこへぬおつあつまろうくんこなどのアにゲキうガーにあつまりどうでおかがちやうそうをそゞ

相逢劇孟家

うちの紋おのゝふうもりくろじもすともうでよ竈のりのくろやいをやりひんまくりよこさまぶろくうをぐ〳〵おやうさきくまいかのべ狐町のおそろがおへろく〳〵ちげのをよびばちよつしおいへさいぐふざうのぞくぬとぬをかく〳〵それもまくよひておれよいふよ牛がつをを返さちをさるちとろぐあるにでいんじゃをれるといのさ行よせいやすをんるがよいとやんてかへらのしおりのさぶ先

寸心言不盡（スンシンイヒツクサズ）　いろ〳〵とひあてすてゝ
前路日將斜（ゼンロヒマサニナンナラントス）　あるときへくらし

おつがるくれあ〳〵ゝかゝの方にもうまいつもちろんのりうそうざ

てゐけ出すの洋は日日のういうれろうあんごう〳〵火（ひ）おつくまでうりんごんのときうりかしさおてるにやうをやくくちいうこと一大事（だいじ）ことくこゝある内緒（ないしょ）も濟（すま）ない事（こと）のお腹（なか）おやたがいよ〳〵のぶーー花（はな）どもがさまうのてくへてそれべあちこひきうなり

江行無題（コウカフムタイ）　三人一歩で六時ともごてそろぞんのめいごんぞもが敵のかどへあるいてくろそんをんへもまいり二十軒てあさぢやをのこ

もひさまへきくまいそ茶屋のひもをながうぐさせて
[illegible]所のあさ市でうんぞうりを一又一よさの
たのしもおまいのめでもないとでけとところがかう
げよおのひの外れ風ちや屋うかでをやつけまーす
とゆへばこんながーくかごさついきーひ舟うせめてもよい
というをこでつぶやきさうぐーく舟でする迄は云髭としの
ゐのひもうーくねーしつのゆく
咫尺愁風雨 ノボルベカラズ
匡廬不可登 山三人へうて坊主が舞るまをおそるます蛇蝎のごー
つてある舟のさうだんは匡廬ごいや屋へろておめひ入
なさばをのこをのうくちそそうよおのりやくへられどもいよ
[illegible]へうくてへうひでいうぐをあんぞうゆくよーぐ

秖疑雲霧窟 ムノクツ
猶有六朝僧 のほひなうひなくこういろ此上をでもさてあうでわ
ようてんさいのぢや○評は曰今の世へぞくうつうつて
ばうぢをごもれをようくいのこよ坊さまもくし名だうう坊さま
わるこおろし袈裟をいうぐくへぞくありめんぐへべーし
秋夜寄丘二十二員外 イレングハイニヨス
も女帝もいのうひわる名とこへようは山まさる女帝
とうんのあらをでのちへこのーとの事をうまと見

へよう二十二よあるうりぞふで二十二の負の外
よをもちまくしてて下さるをと女帝があまくくく
つのよ戒名をろろ長くくーい名とへうぬ
キミヲオモッテヒクヤニツクス懐君属秋夜 君を思ってひく夜に月を
夜へうんでおつとをおうのの特ふうーこたりひあるせと
もなり
サンポ リャウヲニエイス散歩詠涼天 そこでいろもちやをへ出うけて益さん
あんせんく大門れくまでゆきつもどりつをる咏をるとへ
笑そのあれぞそでづきん佐のようである〜か下の句れの
空の二字傍にぬうをつてあのをいう
ヤマニタケヲヨツ山空松子落 のひけもうてべよもやはへあるま
いと内へくりて夜をながめてのれ

ハなにやく物のおちくるこ糸をとゞれをつくてこれをうく
ごみのまつれ実よてであり〜りおまへをおのふの会がそでい
て脇帯のろ〜れ実いおちのせぬうといのやうろう ○活胸
ハいおみどひぐく落ちだ松イウジンマサニイマダ子フラザルベシ幽人應未眠
のこれ影をれるものあるだよく
くおうとをおのふの特ふうくなま
うるにまできをつけるとへよりてつちがうかどよあ
そよも神くれぞよめるさをおまへもろちがうをありの
てねくれずよござるであるの○洋は日大のさよりをし
まれよおるまにくあるも女帝ものちくいお人へだうずを
ろるごくまでだうるるのありまづい孤をといそ
祈べるくぬ
聴江笛送陸侍御 コウテキヲキイテリクジギョヲオクル
しとへて女帝が

そりまでおくるけさこころてうれをす（ゐなか）
遠聽江上笛（トヲクユウニヤウノフエヲキイテ）
の句（く）
臨觴一送君（サカヅキニノゾンデヒトタビキミヲオクル）
還愁獨宿夜（カエッテウレフドクニユウノヨ）
更向郡齋聞（サラニグンサイニムカッテキカニーラ）
そつちやおるーうそぢやそうぢやそもやくのばりておくれるのんー〇洋よ曰さあよわどめでさいくでおひいれをられさくはたびのてうれ今いうにもでろちとーたるまとこれがおそろるおれのおるうてうれきよよこぞろわふ

ひつちやりとらいてそところあるれそもそもうーこのいのぬくがなくれば女帝ハたうめのよわ（ガンヲキク）
聞雁（ぜんく）多のたうりをまろをいふ（ゐなか）
故園耶何處（コエンビヤウトノイヅレノトコロゾ）
歸思方悠哉（キシマサニイウルカナ）
淮南秋雨夜（ワイナンウノヨ）
高齋聞雁來（タウサイガンノキタルヲキク）

雁

さへうく厭ハ々のつらひをそるとやう〳〵此方へのみでハないうと
あるとれふう〳〵○評よ日ひくるとれみをりてあるく厭ハ日
本だしへんまでが百文でもうれぢ二百文ころそのうく
たのこともせぬつゆをさぬくさへづり厭をねざりてぞのもの
ぬ文茶屋の女ありつてんやうくそれぢ女帝とくるまりやあをて
めたりてゆざんあ〳〵だんだんハ百文ハ二文にもあ〳〵ぬりの
をおとしてきくこぞうりまよにやをぬ浜をおりくくひよろ〳〵てうんとおきれる
ひつぢれ方がくつくうちでよいハ女帝うんのだんが
みありてくるとおりかその写がまのくく間く

答李濬　リカンニコタフ

林中觀易罷　リンチウエキヲミヤンテヒラク

溪上對鷗閑　ケイシヤウアウニタイシカンス

楚俗饒詞客　ソゾクニヨウオホシ

何人最往還　ナンビトカモツトモワウクワンス

おまへの内いさうい町へんるれでこ
ありりんをやう今どれいでるう二
三人つれてさてあるんしめの一つかなへべんそふ
てきるとこへくりり○評よ日女帝といふめのいうやうな帳

のりのぐうまれくくんべいうゑんぞのやうにてくださればくおん氣よみなつてこれべ伝まいとゐるんのうち伝人とゐ今いくくがやと汗をひやをうゑりぞみつてでおやらくがはもろを鬼つのやうにおゐてゐるべ候ろく

婕妤怨

るくおやうとくもさ紀ざろて去よさへかるよるべきところもるくぜひをくとこやうにてゐるをそちけ女房のせさゐちゐりうざりたてく氣ざうをひさうれ出てもくく今のおれうくていくく

花枝出建章

のうくとこやうにて胭粉のそり女房くちや座うう去らせざまてむひよいづる花のごくくハ

鳳管發昭陽

つて祢さましいて伝やうにざくくしい去年ふさせんでゐり母ををくひうけ

借問承恩者

そこらしいたこ遠素服陽二乃のざ一死ちをさに

雙蛾幾許長

拭ひ帰でござをでらがちやへたうををどといのやうるやうとこへる

題竹林寺

今戸あさり此ちるとこやうさざと名をうくくるりの大てのの一ぶがきうびやうで死んざるとのろくせよ葬死るあり魚

もろ〳〵の感しきたるところ

歳月人間促（サイゲツニンゲンセマル）　年々（ねん〳〵）に月々（つき〳〵）に行やう促（せまる）の促の字俗きのんざるものあり

うりしまこれらの詩（し）にはせめぬうらんでわらふ

烟霞此地多（エンカコノチヲホシ）　よふちんのくるまうらやましくおもふ

殿勤竹林寺（イニギンニスチクリンジ）　かくる深（ふか）き所のうくるれがうさもてまいるもありがたしとねんごろに佛（ほとけ）を

たのんでくる

更得幾回過（サラニイクタビカヨギルコヲエン）　又こようとおもひてもやくそくでもあれいのあるゝぬよりく陰（かげ）

〇訳は曰このとされるみざを西味（しみ）

秋日（しうじつ）　あさ日（ひ）のねむ〳〵たるやうぬ女房（にようばう）のさしたり

返照入閭巷（ハンセウリヨコウニイル）　夜（よる）の日あかりが向（むか）ふの町（まち）の横丁（よこちやう）へさしこんでそのさしこしてそのさしこしてゆく

憂来誰共語（ウレヘキタリテタレトトモニカタラン）　胸（むね）のうちをかたらふものもなし

古道少人行（コダウニンカワヲヤ）　ふるくよごれさたくさんへみちは人もぬをんでのこ

くせよそこらおうへこられてゐる一足（ひとあし）もふむとたびだちこ

へんつれいてうごりぬりたんなのへんへんのれべこでさぶた

ばちうすところのれどもまさうをふもゐる〳〵ぬ

秋風動禾黍（シウフウクハ・ヒヨヲウゴカス）やぶをまへあさぢおうかとつれてでさうくとそゝぐくしいで

うしや禾（くハ）桑（そ）はこまの法（ほう）ともるべく

和張僕射（チヤウボクノヤカサイ）塞下曲（キヨクラクハス）

つよい女帝（ぢよてい）のれば名（な）とす塞下（さいか）の曲（きよく）陽（やう）のうをつくる

月黒雁飛高（ツキクロフメガントブコウ）害（さま）の亜（あ）れよ書（かき）乃夜（よ）のみづうひ

みぐんの亜（ね）でへいうぬりのうくでかをぬうあればく

一觔もをづまねばうくぬみづくひ石ましうくうゆこよ

つて一角ぐくいよせてべとぐくの用（ふう）よたくぬる（なまど）字（ぬ）

單于遠遁逃（ゼンウトヲクトンタウス）單于（ぜん）へえびをの大ゆうこではいぢるさゆよたらゆよま

ぎれて大ゆんをぬくんとるるて物そうをつけおきたれど

つおよおよあひるいま大ゆんを出るゆんしさ

欲将軽騎逐（ケイキヲモツテカハントホツスルバ）そこでてるいりの女づうひなどをよびておつうけさせる

大雪滿弓刀（タイセツキウタウニミツ）田町（まち）あうりまていろてとうてうく

をにげもない大ゆさで中くおるるゆしやござうぬとう もかをぬゆさはしようよ

い○評よ曰これ女帝がめうくいゆくしやりくく乃

城（しろ）もうせばおのれだうりこむゆく方（かた）よおぬるゆ

とうえるみひあうが内（うち）ゆてがくでのこうろうけあう

とうゆるとにに大ゆさるれば日（ひ）ごろるくれ出

ぢやこひつれていた大ゆのとき刺（さ）よたくぬざうと垂

将（しやう）をくをりてもも一あがりのいあうわうをもの

ゆいとうちやつてありくとえくうり

別盧秦卿（ロシンケイニワカル）
知有前期在（ゼンキノアルアルヲシレドモ）
どく〳〵（くゝ）勾（ほう）
難分此夜中（ワカレガタシコノヨノウチ）
無将故人酒（コゼンノサケヲモッテ）
のろちがはう（サアそのふねどろをみをまへ）
不及石尤風（キイウフウニヲヨバズトスルコトナカレ）
ろちじやないよ
のろまいそのぜよまけ
ろちじやないよ
逆風（ぎやくふう）とてんをおひくをまつ
よいぞの〳〵れいでなさうは
ろちじやないよ

幽州（イウシウ）
征戍在桑乾（セイジユサウカンニアリ）
年々薊水寒（ケイスイサムシ）
殷勤驛西路（インギンニエキセイノミチ）
此去向長安（コヽリサツテチヤウアンニムカフ）
おれどもそれもの〳〵ぬ
くやしいよじや

三閭廟（サンリョビヤウ）屈原（くつげん）三閭大夫（さんりよたいふ）

ふるくありしは二人（ふたり）の歟（か）であり
のこるそのゝち又（また）吉水（きつすい）のこる尾（を）といひ一人（ひとり）は川（かは）へ身（み）をなげその名（な）もろ
去（さる）ぢ大夫（たいふ）をこのる尾大夫（をたいふ）をもよ入（いれ）んとお旧（ふる）くの
淵（ふち）をつひ今日（けふ）どにかよひくれどもざーたゞかりつゝあ
て肌（はだ）をけづさだ（そこ）で大（たい）をやりをおこうて（おもて）ねもあ
の黄金（こがね）をもろて分（わか）ー舟（ふね）かて三又（みつまた）といふところまで
つれきたりいろ〳〵寝席（しんせき）をもてむる大夫（たいふ）も今（いま）へつて
むべきにもあら〳〵わねば怪（あや）しいやうのよ二也（にや）三也（さんや）の契（ちぎり）
約（やく）り〳〵（〳〵）ねべたとくいうやうは分（わか）へるらうも君（きみ）れなる
よとさ〳〵のよへるぬとの一言金石（ごんせき）のごとくあれば大
夫（たいふ）もいま〳〵しくなりて切（きり）ころしは川（かは）へをてしと
もいひ又大夫（たいふ）がおのれと分（わか）をなげうりともいふ情（なさけ）

んでは汨羅（べきら）をつくらいさごれ中（なか）の黄金（こがね）うんざりれ
中（なか）の愚女（ぐぢよ）しと世（よ）のくやあへう扇（あふぎ）はところよ分（わか）る
にあ〳〵泳（およ）どもも貽（のこ）も貽（のこ）さいといよあるをもつて倘（なほ）

沅湘流不盡（ゲンシヤウながれてつきず）

〳〵（〳〵）

屈子悠何深（クツシいうかふかき）

さ〳〵ぐ〳〵幻（げん）宿（しゆく）のおよぶところよあ〳〵だ

日暮秋風起（ひくれしうふうおこる）

〳〵はさみ〳〵くおもそ〳〵

蕭々楓樹林（シヤウ〳〵タリ フウジュ リン）

とありそのおとぞつくとそらゆうで楓（もみぢ）
ときみたをくる（クンオンヲオモフ）

思君恩（つくる君）

小苑鶯歌（シヤウコン アウカ ヤムテ）

ざうぶろうくろうくろうく

おく

獨上意悠々二ついへあがりたるひとりをさをまつ
おりふしの情も入るをてしてのる巻こうりゆくをへのゆを
としをめぬ月のうへしをきつまゝぬ月のこをしてきう
如何望鄉處たゞかようが旧里はあの方うとおも
西北是融州ひとりにどこであつようもゝぬ
めて人ごろつきしれとおがへる
秋風引ふくとそれよ秋われの方ときゝしが方ながへる
何處秋風至うぜのおとにもおどろ
れぬうの夕法

蕭々送雁群よも例更おおんてれそよく
ちいよくねむられぬとふいておほくの風をいてそる
朝来入庭樹よりけ方うゝいよく秋ぜそよ
孤客最先聞由ふべよりの秋をぜいつれむかりき
ま棒といよゝゝさされてふゝれさるあるりかゝず
うゝにも三舎にもおくのまてそるくをると女房が駈
おくくのあり為子のうへよれぞんのうへのれば
暑す

葦路感懐さる夏一さめの壺のりまち
ちへきたる秋ぜ三谷のみそみちうり
おけがこゆるとのふんにん

ゐ〳〵ぬていをつくる
馬嘶白日暮一日のうまたきれるもひもじく
くゐのそへそづむ
劔鳴秋氣來ケンナツテイウキキタル
ざかもく武ぶるひのまるかどぞもゐ〳〵ぬこを
でおもとるい大ゐんう〳〵かへを
我心渺無際ちやをよをづきい
おいろもるきまつさるゐへ一つもない
河上空徘徊先帥雀のやをいがよろとそこう
うちをゆきつめどりつしてゐる
さいこい武ぶ方のゐれがてろゐれ方がぞふであろ

古別離
ふりしあつてめぶろくるゐのスたちろ
ハろりめ
欲別牽郎衣わさろへりれさき衣をひいてゐふ
ろゐあれバスナ扨ていくおろれゐんし
郎今到何處いでゐんをゆし
不恨歸來遲ふいでゐんをゆし
莫向臨邛去ふかゐ〳〵ずゐ川へんをかんりふ
とあそびたゐんしてむざ今

尋隠者不遇（インジヤヲタヅネテアハズ）

松下問童子（シヤウカドウジニトフ）
言師採藥去（イフシサクリヨウニサル）
只在此山中（タヾコノサンチウニアラン）
雲深不知處（クモフカフシラズ）

宮中題（キウチウニダイス）

蓬路生秋艸（レンロシウサウヲショウズ）

上林花滿枝（ジヤウリンハナミツ）

憑高何限意（タカキニヨルカゲンノイ）

無復侍臣知（タダビニンノシルヒトナシ）
あるじたで一ぱいの
勸酒（サケヲスス）ム）勿辞（イナムナカレ）
一出（ひとくち）おちくけを
ざんで茶なし女帝へたのんで一まづへつもつにして
もらふといふやうな上方（うへがた）へのがせる
勸君金屈巵（キミニスヽムキンクッシ）
滿酌不須辞（ミチヤクイナムヲモチヒザレ）
いろをもつてこい
ざけのこゝろよしきよあれが級のつ

これのこゝろよ
花發多風雨（ハナヒライテフウウヲオホシ）
とゝくなりいんもくの
人生足別離（ジンセイベツリタルニ）よくつもりてこゝろんー
旨（むね）よめるゆめのうぬ
ざとそこをやくそくするのも知りやせないそ
日おもうのうるとハ
和（なご）かどうもひよかうぬ
らくいうそうぬものありやといそれぬ
ぐうんべつらーさつ
女帝も一まづ久さねべ
くの一盞（さかづき）よてめいろ

秋日湖上（シウジツコジヤウ）

落日五湖遊（ラクジツゴコユウ）

烟波處々愁（エンハショくウレフ）

あゝくもさりよ（ああをごと）

浮沈千古事（フチンスセンコノコト）

でさうあれども（ざ）義（ぎ）

とうりしとやおもひへ（やく）

もはくをへいうるりの（まゝ）

ゝんすゝも

ゝぬ

誰與問東流（タレトトモニカトウリウニトヘン）

いたぐひ川のあのこゝろ（ぎ）

題慈恩塔（レフンタフニダイス）

女帝のこゝろ（ひさ）

樟（くす）の佛（ほとけ）のおもいぞ（サンカアリ）

漢國山河在（カンコクサンカアリ）

秦陵草樹深（シンリヤウサウジユフカシ）

きけ（ぼ）ーさゝり

暮雲千里色（ボウンセンリノイロ）

日のくれぞうゝ雲（くも）がおこり

つけてさひーれていとゝる

トコロトメユヽロヲイタメズト云フナシ

無處不傷心 これをんこれうるよありしむかし
漢の姐嬉好 綉死燕素の姑絵をうざりし名さうき遊らん
迎の児くんべどもぐさる苦もりしむり
れをぐさい今どこよあるとうちあげきたるていのり
伊州歌 イシウノウタ 牛虫伊勢のののりしがら子へ来
もってひつまづくよ麓がさいろくいろにありぜひるく女房を吉ろくへうる好るれも
のこれようそつくつくるしいの
聞道黄花戍 キクナラクワウクワジュ 孤のさうりよさりべぜひろうを
さりといつれをいをさけるい鄙絵へ今のもとろべし

類年不解兵 ヒンチンヘイヲトカズおろくへついくさをもろうにこんぬどのおまよいるさアムベンケイリノツキなまいれくせうこりもろくき
可憐閨裏月 ヒトヘニカンカノエイヲテラスむろ二人ぶ祢やへさへ
偏照漢家營 今わだくち勝乃のころのまをこてろそでおろくへつのろそのぐくしい中をありの情ふろ
其二 ソノニ
打起黄鶯兒 ワウアウジヲタキメ 月をおろれむる他て実な話をものがおいてまよろてさろへてくろぬろよい

レジヤウニナカレムルコトナカレ
莫教枝上啼
ナクトキセフガユメヲオトロカメ
啼時驚妾夢
レウセイニイタルコトヲエザラニム
不得到遼西
とおもふ大王のところをさまして
ゆめよりもいろてんしさい
哥舒夜帯刀
たてり遠ざけるよう名ばかりぞ名
とすといふ

ホクトセイタカニ
北斗七星高
哥舒夜帯刀
墓へ古くともる茶やもやしくぐるよふてのみれば
ものて狐の女帝とおぼしき
をそゝすて大門よりそのまゝ
てその袋をきうそのうちへくるちや屋を
そゞめをこ赤社くんくすざてのをうちきりきといふ
けもせぬ犯くつをいへどもつぬきゝれぞんとなりし
とうやイニイタルニデムヨボリスルヲウロ
至今窺牧馬

ゑもの[illegible]に今の今までもそのころいきれよい武[illegible]
などいふ大つをそつと出てるにものごとあり[illegible]板などをさ
てゆうくいきたるこてちーてるゐも[illegible]等でもくさせて之
るゐとふりぬこれひとくよは女帝の勢ありしころとこ
をんやなくり

不敢過臨洮（アエテリンウヲヨギラス）

かげにいふ大方れ茶屋をのぞきなどもするゐいろしくく
ゐくぬゐうよこことかりしとゐり陥洮今までもきたる
所の門さをしくん

答人（ヒトニコタフ）

この程（ごろ）人（ひと）ん[illegible]大じやくきんの先生（せんせい）さいそくを
きいゐりて大（だい）極月（ごくげつ）九日（ここのか）飛（と）でるくしそれで
うるさくおもひなくちやをへくるをつくるとこゐる

偶来松樹下（タマクシヤウジユノモトニキタツテ）

そもそもところ

高枕石頭眠（スルラヨタカマノヒキタウニネムル）

いところ外（ほか）の夷（えびす）のお地（ち）あれば今さ
へつゐへごろ[illegible]ついてにーたの
夜々（よよ）でかくるところ石枕（いしまくら）ゐもよいとも
おもひよおていろの[illegible]の住居しやるろくもろく
もくゐるとふものゐり

山中無暦日（サンチウレキジツナシ）

月（つき）かもそくぬゐりの[illegible]の奥（おく）ゐんそのやうに詩季（しき）
寒盡不知年（カンツクレドトシヲシラズ）

家祝歳（いへしうさい）の差別（しやべつ）もなくそのまゝ[illegible]日を中大晦日（おほみそか）
[illegible]ゐこまるつくひづくをそつくーいろくこゐり

正月よりもかまうずにさうでおぼしめつ
とおどくうとひろげおざうかむろがどつてさつでいやを
やきたいなところといふべし○評は曰大こそうよき
があれべ備前(きんこう)金兌のいひうけよいとやすくいと酌
い女房もまもつていざうくのひもうたよも
ミな申けう〳〵とこゝろもちろん女帝座茶座へかほり
〳〵やぢよかくろうのらくのさねらく
い若の殿又虚語(きよご)よあ〳〵に前(まへ)のよ玉(たま)ふ〳〵きく

湯子筌枉解 五

絶終

ハリヤサ。コリヤサ。ヨイ〳〵ヤアトセ。パ
リヤサ。コリヤサ。サッサ。ヤアトセ。ゆ(うんちく)ゑ
わの大き衣をきて志(こゝろざし)ある
ら百両者さ先生ぜ前子筌
去処(さりどころ)ぞと見やうとやくに出来
ましきやぐの勇気乃上井
乃棒(ぼう)おをて不棒斗をそく注

ちゃせん　ちゃのこ　答ていわく水
有（いうこと）不得（えざる）上棒（じょうぼう）は果報（かほう）をうで棒（ぼう）となす
いうまでもなく又中棒（ちゅうぼう）といやみの飛切（とびきり）
才（さい）ばしをめうめうと仕（つかまつ）る猫下棒（ねこしたぼう）
乃（すなわち）ち部屋（へや）中（じゅう）を飛（とび）まわる奴茶（ちゃらつ）釜（がま）乃
完（まった）く一（いち）本（ぽん）の才（さい）ばしをいうこと可（べき）が能（のう）
ばしくらめし云（いう）ホタ涙（なみだ）を流（ながす）

ヨイく目（め）がさえて見（み）
れば、夢（ゆめ）となりし好（よく）て
茶子（ちゃこ）を携（たずさえ）て部屋（へや）乃算（かず）を集（あつめ）る部
通（つう）じて手（て）も自（おのず）ら者（もの）と化（か）して
自（おのず）ら自（おのず）ら答（こたえ）ものなもと
茶釜（ちゃがま）数人（すにん）と集（あつまり）て云

45439

明和七庚寅

日本橋通三丁目
京屋吉兵衛